

●「SHINWA WALK～伝説ぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

# SHINWA WALK 20

## 熱田神楽伝説1(起源と保存会)

伝説  
ぞろ歩き

熱田宮に  
天皇行幸  
奏上す  
古式ゆかしい  
熱田神楽



### 地元の祭り囃子の定番

#### 起源は約1900年前

地元名古屋の祭り囃子の定番ともいえるのが「熱田神楽」です。熱田神楽の中で、祭り囃子として使われるのは6曲程度ですが、楽曲は全部で40曲あまり。なかでも「お天道神楽」「祇園囃子」「左京神楽」「庄中囃子」「植田囃子」が有名です。

熱田神楽の起源は、伝説の時代までさかのぼります。今から1900年近く前、景行天皇(日本武尊の父)が熱田の宮に行幸された時に奏上されたのがはじまりとされていて、天皇の行幸の際には、お天道神楽を奏上したといわれています。

神社の拝殿の前で奉納されている由緒ある伝統文化であるとともに、この地方の祭りに欠くことのできない「里神楽」として、南は知多半島、東は知立あたり、北は犬山・一宮あたり、西は中川区・港区あたりまで広く浸透している「祭りのテーマソング」でもあります。

その熱田神楽を後世に伝えていこうと活動しているの

が熱田神楽保存会(南区鳥山町)です。地元の子供たちや大人たちで組織されるボランティア団体で、会長であり師匠を務めるのは石川来民造さん。石川師匠が自宅に子供たちを集めて熱田神楽を教えるようになり、周りの声に応える形で、平成元年に熱田神楽保存会を結成。現在に至っています。

主な活動としては、毎年GW中の不定日に熱田神宮で熱田神楽を奉納するのが恒例。また、6月5日に行われる熱田まつりでも熱田神楽を奉納するほか、地域の祭りや各種イベントでも演奏を披露するなど、熱田神楽の保存・継承と普及に努めています。

元来は豊作祈願など農耕者たちの感謝の気持ちの表れであった祭り。しかし、サラリーマン社会が一般的となり、祭り本来の意義が薄れています。だからこそ、笛や太鼓を通じて、「心」や「伝統の重み」を伝えることに意義があるのではないのでしょうか。



### 豊饒の女神から冥界の女神へ

#### 秋の収穫はペルセポネのおかげ

熱田神楽など祭り囃子は穀物の豊作祈願のためのものですが、ギリシャ神話で穀物の女神といえばデメテル。五穀豊饒を司る女神です。

そのデメテルとゼウスとの間に生まれたペルセポネは、母デメテルの力を受け継ぎ、穀物を育て収穫を約束する、野原に花を咲かせる女神でした。

子供の頃からとても美しく、愛らしい笑顔を周りにふりまくと、甘い香りとともに色とりどりの花が咲き乱れました。しかし、あまりの美しさから、伯父である冥界の神・ハデスにさらわれてしまうことに。

デメテルは必死にペルセポネを探しましたが、みつかりません。デメテルは悲しみにくれ、女神としての仕事もないがしろになり、大地の草木が育たなくなってしまいました。地上ではたちまち大凶作。困ったゼウスが調停に乗り出し、ハデスはしぶしぶペルセポネを返すことにしました。

ゼウスの伝令としてヘルメスが冥界までペルセポネを迎えに行きましたが、ペルセポネが冥界でざくろの実を食べていたことがわかりました。実は、冥界の食べ物を口にした者は、冥界との結びつきを絶ち切れません。

このままでは、ペルセポネは地上に帰れません。そこで、ゼウスは母であるレアに相談すると、次のような妥協案が出されました。ペルセポネは4ヵ月は冥界の女神として冥界でハデスと生活し、残りの8ヵ月はデメテルの元に帰ること。



▲熱田神楽は毎年GW中の不定日に熱田神宮拝殿前の祈祷殿で奉納される。今年は5月4日に奉納された。

こうして彼女が冥界にいる間の4ヵ月間は地上は凍てつく冬となり、草木は枯れてしまい、彼女が地上に帰って来ると、大地に草木の芽が出て、花が咲き、春が訪れるようになり、秋には収穫がもたらされるようになったのです。

毎年秋の収穫はペルセポネのおかげかもしれません。熱田神楽の音色が聞こえてきたら、ペルセポネに感謝しましょう。



※次回は、熱田神楽伝説2として奉納復活エピソードについて特集します。お楽しみに。

■写真/Kiyoshi K ■イラスト/Rei ■取材文/Icarus